

九七式艦上攻撃機 製作進む



展示空間企画設計・製作・施工などを行っている「株式会社広洋社」専務取締役の齊藤裕行さん。茨城県小美玉市に工場を構え、来春にオープンする地域活性化拠点施設「sora かさい」に展示される九七式艦上攻撃機（以下、九七艦攻）を製作しています。製作の過程や苦労話、そして九七艦攻への思いなどをお伺いしました。

イメージで復元

「カンカンカン」。ドアを開けるとハンマーでたたく音が工場内に響いていました。そこには汗だくになりながら機体の一部を成形している齊藤専務の姿がありました。株式会社広洋社（以下、広洋社）。九七艦攻の実物大模型を製作している会社であり、約1年かけて完成させます。現在、鵜野飛行場跡の備蓄倉庫に展示してある紫電改も広洋社で作られました。ちなみに工場は、紫電改を製作するただけに建てたそうです。

「資料が少ないし、写真を見ながら作っているんです」。そう話す齊藤専務。写真や諸元を基に自らスケッチを

が一番難しいと言います。

九七式艦上攻撃機

昭和12年に日本海軍が採用した艦上攻撃機（中島飛行機と三菱重工業の2種類ある）。機体サイズは、全長10m、全幅15・5mとかなりの大型で、主翼を真ん中で折り畳み空母として運用されました。攻撃力もきわめて高く、計800kgの爆弾や航空魚雷1発を装備できました。

また、金属製の低翼単葉機であり、当時は世界トップクラスの飛行機でしたが、やがて旧式になり、最終的に練習機として使用されるようになります。

止めてから、本止めする際にパーツがきちんと填らず浮いてしまうんです。そしたら全部やり直します」。(※写真5)現在作業中の機体は専務の見立てでは6割がやり直しのことです。自分だと心が折れますが、「職人魂に火が付きます」と笑顔で作業を続けられました。

安全且つ丈夫に

九七艦攻は、高さ12mの所にチェーンブロックで吊るして展示します。「重さは1トンあります。軽目穴を開けて軽量化を図ります。後は小まめに測り、微調整をしていきます」。躯体に穴をあけ、軽量化を図りながら丈夫なものを作るの

し、データをCAD（設計支援ソフト）に取り込みます。(※写真2)そして、10分の1の骨格模型を作り、実際の写真を見ながらパーツを照合していきます。問題がなければ機体作りに入っていきます。「イメージで作るので形にするのが難しい」。データを作成するのに試行錯誤の連続で3カ月は掛かるそうです。

機体作りへ

まずは躯体。躯体はスチールを使用しています。板状のスチールをプレスブレーキという曲面を作る機械で加工し、溶接していきます。次は外板です。

①

②

③

④

⑤

①完成に向けて作業を進める②写真を見ながらイメージ③ハンマーでアルミ板をたたき丸みを付ける④イングリッシュホイールで成形する⑤成形したアルミ板をエンジン部分に貼り付ける



来春オープンする地域活性化拠点施設「sora かさい」。高さ12mのところに九七式艦上攻撃機の実物大模型が展示されます。

紫電改を製作するために建てた工場。ここで九七式艦上攻撃機実物大模型が作られています。周りの環境も良く、1日8時間作業に没頭することもあるそうです。左から(株)広洋社齊藤社長、齊藤専務、専務の妻金子さん

